

コナン・ドイルの『ランセット』

宮野 佳¹⁾, 本田蘭子²⁾

1) 川崎医科大学自然科学

2) 広島大学教養教育

(令和5年11月10日受理)

Conan Doyle's Papers to *The Lancet*Kei MIYANO¹⁾, Ranko HONDA²⁾1) *Department of Natural Sciences, Kawasaki Medical School*2) *Liberal Arts Education, Hiroshima University**(Accepted on November 10, 2023)*

概 要

名探偵シャーロック・ホームズを創作したコナン・ドイル (Sir Arthur Conan Doyle) は、エディンバラ大学医学部出身の医師だったというのは比較的知られているだろう。卒業から間もない頃、雌伏して医師としての雄飛を待つドイルは、診療所で観察された症例報告を医学誌に寄稿している。作家として名を成した後も、ある事件について、かの探偵を思わせる口ぶりで質問状を投稿している。また、医学に対する考えを表明した講演内容が掲載されたこともあった。これらの書簡 (correspondence) と学会抄録 (conference abstract) は、現代においても、一般に最もよく知られ、最も権威あるイギリスの『ランセット』 (*The Lancet*) に掲載されている。

本稿では、ドイルの『ランセット』への投稿を、彼の手紙やホームズ作品などを交えながら、紹介する。折しも2023年は、『ランセット』の創刊200周年に当たる。一流の雑誌の長い歴史の1ページに刻まれた、コナン・ドイルの投稿はどのようなもので、その背景には何があるのか。希代のストーリーテラーだったドイルの人生を垣間見ながら、医師としての側面に光を当て、来し方に思いを馳せる機会になればと思う。

キーワード：コナン・ドイル、ランセット、シャーロック・ホームズ、ジョセフ・ベル、白血病

Abstract

Sir Arthur Conan Doyle, author of the famous detective novel *Sherlock Holmes*, was a physician from the University of Edinburgh Medical School. Shortly after graduation, Doyle contributed correspondence articles on some clinical cases to *The Lancet*, which is one of the most prestigious medical journals to date. After gaining popularity as a writer, he submitted a question about a criminal case in a manner similar to that of the detective. Furthermore, a conference abstract describing his thoughts on medicine was published in the same journal.

Notably, 2023 marks the 200th anniversary of the first issue of *The Lancet*. This article presents Doyle's papers published in *The Lancet*, along with citations to his letters and works related to

Sherlock Holmes. “What were Conan Doyle’s papers, and what was their background?” will be addressed in this article. Finally, we would like to take this opportunity to reflect on his life and career as a physician.

Key words: Sir Arthur Conan Doyle, *The Lancet*, *Sherlock Holmes*, Joseph Bell, Leucocythemia

1. はじめに¹⁾

“Had it been *The Lancet* or *The British Medical Journal* it would have helped me.”

あれが『ランセット』か『英国医学会誌』だったら、私の助けにもなったのですけれど。

《白面の兵士

The Adventure of the Blanched Soldier》^{6,7)}

ホームズのこの台詞は、《白面の兵士》で謎解きをする際のものだが、物語のプロットにとってそれほど重要なわけではない。ところが、ここで挙げられている二つの医学誌が、当時すでに実際に存在していたのみならず、現在も高い権威を有する雑誌であること、そして、医師としてのドイル自身が愛読し、時には寄稿さえしていたことを考え合わせると、感慨深いものがある。

特に『ランセット』は、今年（2023年）ちょうど創刊200周年という節目を迎える。Clarivate社提供のJournal Citation Reportsによれば、2022年のインパクトファクターは168.9を誇り、これはMEDICINE, GENERAL & INTERNALの分野における1位の獲得を意味する。名実とも世界で最も影響力のあるジャーナルの長い歴史は、医学界や科学界に貢献してきた歴史でもある。若き医師ドイルにとっても、『ランセット』に論文が掲載されることは名誉なことであったのだろう。ある日、母親への手紙で以下のように記している。

…僕の計画は明確です——症例を詳細に観察し、専門性を高め、『ランセット』

に投稿し、文学で収入を補填し、友人を作って縁のあるすべての人と懇意になり、10年でも必要とあらば待つて、そしてチャンスが訪れたら迅速かつ果敢に名誉ある外科医職を全うしましょう³⁾。

本稿では、ドイルの『ランセット』への投稿を紹介する。ドイルの論文が掲載された『ランセット』の紙面は、川崎医科大学附属図書館が全て迅速に取り寄せてくれた。医学部を卒業から間もない頃の症例報告には、医師としてのドイルの側面が垣間見られる一方で、1907年の投稿には、かの探偵のような切り口で、実際の犯罪について世論を動かすための主張を行っている。また1910年には、ある病院で行われたドイルの講演について掲載されているが、そこでは彼の医学への思いが表明されている。

今年2023年は、折しも『ランセット』の創刊200周年に当たるのみならず、生成系AI元年としても、今後人々に記憶されることだろう。“表現する”という人間の根源的な行為を通して、人間の想像性／創造性を問うことが求められている。希代のストーリーテラーでもあったドイルの人生を垣間見ながら、医師としての側面を紹介することで、来し方に思いを馳せる機会になればと思う。

2. 見ると観る

“You see, but you do not observe”
君は見てはいるけれど、観ていない。

《ボヘミアの醜聞 *A Scandal in Bohemia*》⁸⁾

アーサー・イグナティウス・コナン・ドイル (Sir Arthur Ignatius Conan Doyle, 1859-1930) は1859年5月22日、スコットランドのエディンバラで生を受けた。父親の Charles Altamont Doyle は、アイルランドにルーツのある芸術家気質の家系の出だったが、ドイルの成長過程ですでにアルコール依存症に悩まされ、後にてんかんも発症するなど、健康面で恵まれず、一家は経済的にも厳しい環境にあった。

そうした状況で家庭を支えたのは母親のメアリー (Mary) で、彼女はフランス語を解するなど教育水準が高く、知的にも精神的にもドイルに影響を与えたようである。A *Life in Letters*³⁾ に収められた手紙の大半は、ドイルがメアリーに送ったもので構成されている。その量からしても、内容からしても、ドイルにとってメアリーが特別な存在だったことがうかがえる。

1876年、エディンバラ大学医学部に進学したドイルは、そうした経済面での苦境から奨学金の獲得を目指すのみならず、学費の足しにするために、複数の病院等で働きながら、医学を修めていった。そのうちの一つ、エディンバラ王立病院では外来患者担当の助手として指名されたが、これはホームズ作品の愛読者からすれば幸運と言える。その際、知遇を得た外科医のジョセフ・ベル博士 (Joseph Bell, 1837-1911) こそが、後のシャーロック・ホームズのモデルだというのはよく知られている事実だからである。例えば、ベル博士は初診で患者が入ってくるなり、

ベル：さてと、あなた、軍隊にいらっしやいましたね？

患者：ええ、そうです。

ベル：除隊してから長くはないでしょうね？

患者：ええ、長くありません。

ベル：高地連隊ですね？

患者：ええ、そうです。

ベル：下士官ですね？

患者：ええ、そうです。

ベル：バルバドスに駐屯されていませんか？

患者：ええ、そうです²⁾。

まるでベーカー街での会話と見まがうこのやり取りは、ドイルが自伝の中で、ベル博士を紹介するときに披露しているものである。博士は鋭い観察眼で患者の状況や経歴を言い当てる“手品”を披露し、ドイルたちを魅了した。

ベルは身体的にも精神的にも傑出した人物だった。…たいへん熟練した外科医だったが、彼の特筆すべき点は診断にあって、これは単に病気を当てるのではなく、職業や性格までも言い当てるのだった。…私は彼のやり方を学ぶ機会がたつぷりとあって、気づいたのだが、彼は一瞥で私が事前に患者本人に聞いたよりも多くのことをみてとることがよくあった²⁾。

ちらりと患者に目を走らせただけで多くを看取るベル博士のメソッドは、まさにホームズのそれである。件の患者について訝る学生たちを前に、博士は次のように謎解きをしている。

さて、諸君、この人は卑しからぬ人物だが、帽子を取るということをしなかった。軍隊では帽子は取らないのだが、もし除隊してからしばらく経っていたら、帽子を取るという一般の慣例をこの人も習得したことだろう。どうも風格があり、見るからにスコットランド人である。バルバドスと言ったのは、この人の主訴が象皮病だからだが、これはイングリッドではなく、西インドのものだ²⁾。

説明を聞けばいかにも至極当然なのだが、それまでは手品のように不可思議な気持ちになるのもまた、ホームズもののお決まりでユーモラスな手法と同じだ。理論的な思考と科学的な手法に基づく推理は、シャーロック・ホームズの最たる魅力の一つである。ドイルいわく「科学的な探偵 a scientific detective」²⁾としてのホームズの基礎を成したのは、こうして医学生として培ってきた観察眼だったのだろう。

ホームズものの最初の短編《ボヘミアの醜聞》の冒頭には、“観察”についてホームズがワトスンへと投げた次の象徴的な台詞がある。「君は見てはいるけれど、観ていない。」⁸⁾—これは科学やその過程での実験などに従事する者にとっては、馴染みのある概念だろう。

3. 「科学的な探偵」

“I’ve found it! I’ve found it! … I have found a reagent which is precipitated by hemoglobin, and by nothing else.”

見つけた！見つけたよ！…ヘモグロビンと混ぜると沈殿する試薬を見つけたんだ、その他のものでは決して沈殿しないんだよ。

《緋色の研究 *A Study in Scarlet*》⁹⁾

犯罪に科学捜査が応用される新しい時代を、ホームズというキャラクターは先導したと言っているのかもしれない。記念すべきホームズ作品の第一作目《緋色の研究》というタイトルが、すでにそのことを的確に表しているが（緋色＝血液）、冒頭に描かれるホームズとワトスンとの出会いの場面では、ホームズは化学薬品に囲まれて実験にいそしみながら、第一声として狂喜しながら上記の台詞を口走るのである。

『科学探偵 シャーロック・ホームズ』¹²⁾によれば、指紋の活用、足跡の分析、筆跡の鑑定、暗号学など、ホームズもので初めて描かれた科学的な手法は数多い。中でも化学は、ホームズ

の趣味の一つでもあり、ベーカー街221bの間借りした部屋には、所狭しと実験器具が並べられ、怪しげな実験に昼夜を問わず夢中になっていた。ドイル自身の化学的な知識については否定的な意見もあるが、その反面、飛躍的に進歩を遂げた時代でもあった。

「時は常に1895年なり It is always 1895」⁴⁾という言い回しは、ホームズの時代を表すときに使われる合言葉のようなものだが、19世紀後半という時代を考えてみれば、1851年のロンドンの万国博覧会に始まり、ドイルが生まれた59年には、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』が著され大きな衝撃を与えた（ダーウィンはエディンバラ大学へも通っていた）。光学機器の発達とともに、62年にはフランスのルイ・パスツールが低温殺菌法を見出し、76年にはドイツのロベルト・コッホが炭そ菌、次いで82年には結核菌を発見するなど、生命科学の分野での発達は特に目覚ましいものがあつた。

工業技術的にも、50年に英仏海峡に海底ケーブルが敷設され、63年には世界初の地下鉄がロンドンで開通、87年にはグラハム・ベル（彼もエディンバラ大学出身）が電話を発明している。日本とのつながり而言えば、92年からロンドンに滞在した南方熊楠は、大英博物館へ通いつめながら、*Nature*へ多くの論文を寄稿し、入れ代わるようにして1900年から渡英した夏目漱石は、霧のロンドンで鬱々としながら過ごしたのだった。

ロンドンという都市の喧騒はますます加速し、人々の生活も変化していった。《青い紅玉 *The Adventure of the Blue Carbuncle*》で、ホームズは拾った帽子について、次のように言う。

Only one of those whimsical little incidents which will happen when you have four million human beings all jostling each other within the space of a few square miles.

これは400万もの人間が数平方マイルという狭いところにひしめき合っているから起こる、気まぐれで取るに足らない出来事のほんのひとつに過ぎない¹⁰⁾。

時代は明らかに躍動していたが、それでも前時代的なところも見受けられた。例えば、“ランセット”といえは、現代の私たちには採血用の穿刺針として聞き覚えがあるかもしれない。しかし、*Oxford English Dictionary*によれば、医療器具としての“lancet”は1440年に初出しているが、瀉血に用いられることが多かった。

瀉血は治療方法としての長い歴史がある。広範な症状に用いられ、血液を抜いて改善を期待するもので、18世紀ごろには広く一般的に行われていた。19世紀になって次第に、その効用を疑問視し、忌避する傾向にあったが、実際のところ20世紀まで続けられたと言われている。そういう新旧の知識や技術が混交する時代だった。そして、こうした変遷の歴史のあるランセットという名前を冠した医学誌が、今回取り上げる『ランセット』である。

4. *The Lancet*

外科医 Thomas Wakley (1798-1862) によって『ランセット』(*The Lancet*) の創刊号¹³⁾が出されたのは、1823年10月5日のことである。単なる医学誌としてよりむしろ、医学的な研究や科学の発展を通して、社会的および政治的変革につながるような場になることを期待し、専門家や医師に加えて、一般の人々をも読者層として想定されたものだった。創刊号の序文によれば、その内容もいわゆる「講演 Lectures」のほかに、イギリス内外で確認されるあらゆる重要な症例の正確な記述が掲載されることになった。序文は、次のような言葉で締めくくられている。

謹んで申し上げますが、我々の記事は医学情報に限定されるものではありません、それどころか、我々は『ランセット』を現代の文献の完全な編年誌 (a complete Chronicle of current Literature) とならしめんがために不屈の努力を傾ける所存です¹³⁾。

こうした創刊当時からの理念が200年という長い歴史の中で継承されながら、世界的に重要な多くの報告も掲載していくことで、『ランセット』という雑誌を確固たる地位へと導いてきたよう思われる。例えば、ドイルが『ランセット』に寄稿していた同時期のものとして思い出されるのは、北里柴三郎の香港でのペスト菌の発見報告がある¹⁴⁾。すでに世界的な名声を得ていた北里が、中世以来もっとも恐れられた伝染病の病原菌発見を世界に先駆けて行ったのが、1894年の『ランセット』誌上でのことだった¹⁵⁾。

他方、一介の医学生であったドイルもまた、学生時代からすでに *The British Medical Journal* を含めて医学誌等に投稿している。『ランセット』へは、確認できる限り、1882年から1910年にかけて、ドイルの四つの論文が掲載されている。そのうち三つは、“To the Editor(s) of THE LANCET. SIR(S), —” で始まる「書簡 correspondence」と呼ばれる形式で、症例報告 (case report) や実際に起きた冤罪事件を救済するための意見を述べており、4つ目は「学会抄録 conference abstract」として、講演の内容がまとめられている。以下、それぞれを紹介していく。

5. 初めての『ランセット』

今週の『ランセット』に掲載された白血病についての僕の論文をみてくれましたか？

母メアリーへの手紙 1882年3月³⁾

1882年3月、ドイルは母メアリーへ宛てた手紙でこう語りかけ、続けて以下のように CONAN であるはずの自身の署名が、COWAN と誤植されたいきさつを述べているが、文面から滲むのは、彼の誇らしげな様子である。おそらくこれが、ドイルにとって初めて『ランセット』に受理された論文であることを考えれば、初々しい様子は微笑ましくもある。

彼らはまたしても、あの忌々しい Cowan と書いています。僕に何が出来るっていうんでしょう。僕はいつもとても注意深く自分の n の文字を書いています。寄稿の礼状に Cowan と書かれているのを目にしたので、僕はさっそく n の文字の下に線を引いた葉書を書いて送りました。でも、御覧の通り、すべては無に帰しました。それにしても、とても学究的に読めませんか？³⁾

実際、この時の correspondence の署名は次のように記されている¹⁶⁾。Aston, March, 1882. A. COWAN DOYLE, M.B., C.M. EDIN. 現代とは異なり、詳細な Affiliations は記されていないが、M.B. はラテン語で *Medicinae Baccalaureus* (Bachelor of Medicine) 「医学士」、C.M. はラテン語で *Chirurgiae Magister* (Master of Surgery) 「外科修士」、EDIN はスコットランドの首都エディンバラに所在するエディンバラ大学のことを表す。これらの情報から、著者はエディンバラ大学出身で医学士・外科修士の Cowan Doyle 氏であることがわかる。

この頃のドイルは、1881年6月に医学士と外科医学修士の認定試験に合格した後、8月に卒業している。医学生時代の特筆する出来事は、1880年2月から7か月ほど、船医として捕鯨船ホープ号に乗船したことで、鉾打ちやアザラシ狩りなどの体験（凍てついた海へ転落したこと

もあり、仲間から「偉大な北のダイバー Great Northern Diver」³⁾ と呼ばれた) もさることながら、ドイルにとって「純真無垢」で「ロマン」にも満ちていた極北に身を置くということ自体が魅力的だった。自伝での表現を借りれば、乗り込むときは「大きくてちぐはぐだった少年 a big, stragglng youth」は、「力強く成熟した大人 a powerful, well-grown man」になって船を後にしたのである²⁾。

卒業後はアフリカ汽船会社に船医として就職したが、1882年1月に退職、1882年5月から級友に誘われてプリマスの診療所の共同経営者となるも、わずか2ヶ月で両者の関係は破綻している。この correspondence は、投函日からすれば、船医として西アフリカから帰国して間もない頃に執筆したものと思われる。

6. Correspondence : case report (症例報告) 〈NOTES ON A CASE OF

LEUCOCYTHÆMIA (1882)〉¹⁶⁾

さて、このドイルにとって初めての『ランセット』にあたる correspondence のタイトルは“NOTES ON A CASE OF LEUCOCYTHÆMIA”で、1882年3月25日付の同誌に掲載された。医学生時代に助手として働いていた Mr. Hoare の元を診察に訪れた患者について、具体的な症状を挙げながら、見解を述べたものである。

内容を要約すると、患者は体格の良い29歳の男性で、右の肋骨縁から左の上前腸骨棘まで、腹部全体に広がる大きな腫れを主訴に Mr. Hoare の診療所に来院した。調べてみると、非常に肥大した脾臓であることが判明した。患者の話では、数年前アメリカでマラリアの急激な悪寒 (a sharp attack of ague) に見舞われ、その後完治したとは言い切れないところもあるが、少なくとも主訴の腫れについては最近になって現れ、この数週間で次第に大きくなったとのことである。その他、体重減少や嘔吐などの症状もみられた。

顕微鏡で患者の血液を調べてみると、白血球の数が異常に増加し、白血球と赤血球の割合が1.7にまで上昇していたことから、白血病であると診断したようだ。そこで当初、患者に鉄とキニーネを処方してみたが、効果がないのを見て取ると、次いで、かなりの量のヒ素をヨウ化カリウムと塩化カリウムとの組み合わせで処方しているところだった。幸い、腫瘍はすでに縮小して、二次的な症状も改善しているところであるという。そして、「この症例の主な関心事」として、既往歴としてのマラリア性の毒とその後発症する白血病 (the malarious poison and the subsequent leucocythæmia) との関連を挙げている。

実際、この患者は本当に過去にマラリアに罹患していたのか、あるいは現在の症状は白血病なのか、知りようはない。また、ドイルの示唆についても脈絡なく感じるが、この疾病についての歴史的検証記事として、*British Journal of Haematology* に2000年に掲載された “THE STORY OF CHRONIC MYELOID LEUKAEMIA”¹⁷⁾ では、この1882年のドイルの『ランセット』が引用され、既往歴としてのマラリアと白血病を結びつけるのは、「当時の定説」だとしている。仮にこの指摘が妥当だとすれば、ドイルは当時の医学界の傾向を把握し、それを裏付ける症例をまた一つ積み上げたということなのだろう。

そもそも白血病の初確認については諸説あるものの、19世紀半ばに、イギリスの John Hughes Bennett (1812-1875) やドイツの Rudolf Virchow (1821-1902) がそれぞれ報告を挙げている。例えば、前者は1845年、“CASE OF HYPERTROPHY OF THE SPLEEN AND LIVER, WHICH DEATH TOOK PLACE FROM SUPPURATION OF THE BLOOD”¹⁸⁾ として詳細な症例報告を残している。さらに、*Oxford English Dictionary* によれば、この Bennett によって1852年、初めて

“Leucocythæmia” という言葉が使用されたという。

その後、ヒ素化合物に注目していたドイツのパウル・エールリッヒ (Paul Ehrlich, 1854-1915) が、1879年に血液細胞の染色法を導入し、白血病の分類を大きく進歩させたという経緯があるが、ドイルの投稿した1882年の段階では、白血病の原因も治療法も明確とは言えない状況だった。ドイル自身も当該論文で「珍しい rare」「興味深い curious」「曖昧な obscure」病気であると形容しているとおりである。

7. Correspondence : case report (症例報告) 〈THE REMOTE EFFECTS OF GOUT (1884)〉¹⁹⁾

このところ『ランセット』へのリウマチに関する論文にかりきりですが、受理されるかどうかわかりません。

母メアリーへの手紙 1883年1月ごろ³⁾

上記の手紙で触れているリウマチに関する論文は『ランセット』では見当たらないので、ドイルは結局のところ投稿しなかった、あるいは投稿しても掲載されなかったのかもしれないが、日々研鑽を積んでいたことは想像できる。他方、確認できる限り2つ目の『ランセット』への correspondence は、1884年の“痛風”に関する症例報告である。「私は、先週の『ランセット』に掲載された、ある種の目の病気と痛風の関係性についての指摘をとて興味深く拝見しました」と始まり、タイトルは“THE REMOTE EFFECTS OF GOUT”。

内容は、3世代にわたって痛風が様々な症状として現れていることを指摘するものである。発端は、サウスシーで開業していたドイルのもとに、湿疹や乾癬などの皮膚症状を訴えて受診した父親で、患者本人によれば、痛風のような症状はこれまで一度も経験したことがなかったという。しかし、間もなくその娘が痛風を疑わ

せる目の痛みを訴えたことから、ドイルは家族の既往歴を綿密に調査した。すると、祖父が長年痛風で苦しんだことが判明した。すなわち、彼らは3世代にわたって痛風に罹患しており、祖父は典型的な症状を示す一方、父親は一見痛風とは分からない皮膚病として現れ、その娘は目にのみ症状が出ていると主張している。

ドイルはこれらの症例を、痛風が多様な症状 (the protean character) を示すものとして提示しているが、当時の痛風の定義もやはり曖昧なところがあった。痛風はかなり一般的な疾病として認識されていたことを考えれば、現代では痛風ではないその他の症状も、痛風の範疇に考えられていたのだろう。尿酸の化学構造が明らかにされ、尿酸測定法が開発されるのは、20世紀に入ってからのことである。

この頃のドイルは、1882年7月からポーツマス郊外のサウスシーで個人診療所を開業したものの、結果として言えば、ここでも成功を収めることはなかった。毎号の『ランセット』の記事を読みながら、髀肉の嘆を漏らすドイルの姿が目に見えが、この correspondence からは、患者たちの症状に対して真摯に向き合い、あらゆる可能性を考慮しながら、診察を続けていたこともうかがわれる。この投稿には1884年11月29日の日付が付されており、名探偵の誕生まで約2年半前を待つことになる。

8. ホームズ誕生

私は喜びを爆発させて決心した、もやい[・]を断ち切るのだ、そしてこれからは、ものを書く才能でやっていくのだ。…とうとう私は自分の人生の舵を握ったのだった。

*Memories and Adventures*²⁾

サウスシーでの診療所は繁盛しないまま継続していた一方で、ドイルは1886年、ついにホームズものの第一作目となる《緋色の研究》を脱

稿した。これが世紀を超えて愛されるキャラクターの誕生になるとは、ドイル自身想像もしていなかったのかもしれない。1888年にはホームズものの第二作目となる《四つの署名 *The Sign of Four*》だけでなく、他の歴史小説も執筆している。

コナン・ドイルに作家としての転機が訪れたのはいつだろうか。医学生時代から小説を書き、時には原稿料をもらうなど、彼の生来のストーリーテラーとしての才能は常に、彼の人生を彩ってきていた。とはいえ、仮に小説を書くとしても、できれば硬派な歴史小説の書き手でありたいと願っていたし、当初の計画は、あくまで医師として生計を立てることを主軸と考えおり、常に最新の医学や科学に関する知見を求めていたようである。

例えば、1890年8月、ロベルト・コッホによるツベルクリンを用いた結核治療法が発表された際には、興味を持ったドイルは実際にベルリンまで赴いた上で、『デイリー・テレグラフ』 (*The Daily Telegraph*) でその不備を指摘している。当時のコッホといえ、すでに世界的な細菌学の権威で、結核菌をはじめ数々の発見をしたことでその名声は確たるものだった。ちなみに、後にコッホの研究の不十分さが判明したが、ドイルはそのことを得意げな様子で振り返っている。同年12月には、ドイルはサウスシーでの診療に見切りをつけ、高度な眼科医療を学ぶためにウィーンへと旅立った。

1891年春、ウィーンから帰国後、ロンドンで眼科を開業したドイルだが、興味深いことに、同時期にはホームズものの短編を怒涛の如く執筆している。《ボヘミアの醜聞 *A Scandal in Bohemia*》《花婿失踪事件 *A Case Of Identity*》《赤毛連盟 *The Red-Headed League*》《ボスコム渓谷の惨劇 *The Boscombe Valley Mystery*》《オレンジの種 *The Five Orange Pips*》など、その後ホームズものの傑作として名高い作品が次々に脱稿されており、機は熟しているように見える。自



写真1 ロンドンのベーカー街にある The Sherlock Holmes Museum 前にて。写真は入館を待つ長蛇の列。人気の健在ぶりがうかがえる。2014年 筆者撮影



写真2 ホームズ作品の世界観が再現された館内にて。写真は部屋の一角、机の上には光学顕微鏡が陣取り、棚にはフラスコ等の化学薬品が所せましと並ぶ。傍らには、ホームズ愛用のヴァイオリン。2014年 筆者撮影

伝によれば、この頃悪性のインフルエンザに罹患し、生死をさまよう中で、作家への転身について天啓にも似た確信を得たようである。上記に引用した箇所である。

実際、同年6月に『ストランド・マガジン』(*The Strand Magazine*)でホームズものの短編の連載が開始されると、同誌の売り上げ数を大幅に押し上げた。そしてドイルは、ついに作家を本分とする決意の上、ロンドンを引き払い、サウス・ノーウッドへ転居、その後12月までの間に、《唇のねじれた男 *The Man with the Twisted Lip*》《まだらの紐 *The Adventure of the Speckled Band*》《ぶな屋敷 *The Adventure of the Copper Beeches*》など計7編の短編を脱稿している。最終的にはホームズものは、4編の長編と56編の短編が発表されることになる。

最終作となる1927年の《シヨスコム荘 *The Adventure of Shoscombe Old Place*》はドイルの死の3年前の発表ということを見ると、彼のライフワークのようにも見えるが、実際には、ホームズもの以外の多彩な作品を残している。また、探偵小説家としての地位がゆるぎないものとなるにつれて、実世界でも、ドイルのも

とには事件の相談が寄せられるようになっていた。1907年1月には、久しぶりに『ランセット』へ投稿しているが、これはそれまでの症例報告とは異なり、医師というよりも、探偵のような切り口なのはそのためである。

9. Correspondence: The case of George Edalji (エダルジ事件)

〈THE CASE OF GEORGE EDALJI: A QUESTION FOR OPHTHALMOLOGISTS (1907)〉²⁰⁾

“It was, as Dr. Watson told us, a form of knife which is used for the most delicate operations known in surgery. And it was to be used for a delicate operation that night”.

ワトスン君が言っていたように、あれは外科の中でも最も繊細な手術に使われるメスでした。そして、あの夜、実際に繊細な手術に使われることになっていたのです。

《白銀号事件 *Silver Blaze*》¹¹⁾

『ランセット』掲載の三つ目となる

correspondence は、症例報告ではなく、実際の事件に起因するもので、その事件を冤罪だと感じたドイルが、容疑を晴らすために医師としての知識を背景として質問状を突きつけるという形式をとっている。1907年1月19日付である。

その事件というのは、イギリスの弁護士であるジョージ・アーネスト・トンプソン・エダルジ (George Ernest Thompson Edalji) の冤罪事件のことで、ここでは詳細は省くが、彼は馬や牛を残忍に殺害したり、馬の脚を切ったりしたという動物虐待の罪により、重労働を課せられて3年にわたって服役した後、一旦は冤罪として釈放された。ところが、世間ではエダルジ氏の嫌疑は晴れず、仕事もままならない窮地に陥り、ドイルに助けを求めたものである。背景には父親がインドからの移民という人種差別的な偏見があった。

ドイルは正義を重んじる騎士道的精神の持ち主でもあり、また眼科の専門的知識や実際にエダルジ氏と面会した時の様子から、彼の無実を確信した。というのも、エダルジ氏と対面した際、彼は新聞に目を近づけ紙面をずらしながら読んでいたが、眼科を志したドイルはすぐに、彼が極度の近視で、乱視も入っている状態だと見抜いたからだ。そこで彼の汚名をすすぐキャンペーンの一環として、『ランセット』へ投稿したのが、「眼科医への質問」という形式をとった correspondence である。ドイルはエダルジ氏の視力を詳細に記載しながら問いかける。

…彼が月も星もない真っ暗な夜に出かけ、時にフェンスを越えたり、垣根の隙間を見つけたり、幅広い線路を横切ったりしながら、半マイルに渡って進み、広い野原のどこにいるかもわからない馬を見つけた後に手足を切断し、はたまた半マイルを戻る、これらすべてを彼が犯行に使える上限の35分以内に行くことは物理的に可能だと考えますか？ エダル

ジ氏は眼鏡をかけていなかったのである²⁰⁾。

ところで、エダルジ事件はホームズ作品に親しみがある者には《白銀号事件》を想起させるかもしれない。《白銀号事件》のプロットに組み込まれている、暗闇の草原に競走馬を連れ出して脚の腱をメスで傷つける企みや冤罪事件になる可能性など、両者には類似点が複数ある。

実際のところ、時期的に言えば、《白銀号事件》はエダルジ事件の10年以上前に執筆されており、この冤罪事件をモデルとして作品が生み出されたわけではない。一方で、エダルジ氏の事件は、ドイルが医師として身に着けた知識や観察眼、生来の正義感、名の知られた作家としての影響力等が、エダルジ氏を世間の不当な疑惑から救い出す原動力となったことは確かだろう。

10. Conference Abstract : Introductory Address

〈ST. MARY'S HOSPITAL. INTRODUCTORY ADDRESS ON "THE ROMANCE OF MEDICINE" (1910)〉²¹⁾

僕の医学についての講演が、おそらく、『ランセット』にかなり詳しく掲載されることになると思いますから、コピーを何部か送りますね。かなりいい出来だと思います。

母メアリーへの手紙 1910年9月³⁾

ドイルの最後の『ランセット』は、1910年10月8日号に掲載されたものだが、これは彼が St. Mary's Hospital で医学生等に対して "THE ROMANCE OF MEDICINE" と題して講演した内容が掲載されたものである。この講演には、ドイルの医学に対する考えが表明されているので、内容をかいつまんで紹介する。

ドイルは自身の経歴に簡潔に言及した後で、医学教育の重要性を述べながら、まずは常に謙

虚さを保つことが大切であると説いている。というのも、世界にはまだ分からないことが多く、実際、まだ分かりはじめてもいないというのが真実だと。したがって、謙虚な姿勢で常に新しい知見などを求める姿勢が必要とされるが、それだけでなく、親切心や人間性の重要性も指摘している。

医学的な知識の有用性については、「小さな自分専用のランタン a little private lantern」で、一般の人にとっては暗闇であるところに光を投げかけることができることという比喻を用いて表現している。そして、複数の歴史的な人物と彼らの疾患について指摘し、そうした疾患が彼らの決断や出来事にいかに影響したのかに言及している。最後に、医学に携わることで、金銭的な恩恵を受けることはなかなか難しいものの、それ以上の価値があることを指摘している。そして、

利他的であること、恐れを知らぬこと、人間性、謙虚さ、プロフェッショナルとしての自負、これらは母なる医学が常に私たちに求めてきた誇れる資質なのです²¹⁾。

この講演を通してのドイルの言葉には、彼自身が有力な経済的支援や縁故のない中で、医師として成功を収めることに苦心したことや、そうした状況にあっても、医学や科学を通して得てきた知識や情報、また思考方法によって、人生を豊かなものとしてきたことがうかがい知れる。また、「小さな自分専用のランタン」という言葉は、何も医学にだけ限定されるものでもないように思われる。人はそれぞれ専門とするものがある時、その分野を通して物事を見たり、考えたりすることができることを思えば、これは一種の普遍的な表現ではないだろうか。

11. おわりに

コナン・ドイルといえば、後世の私たちに

とっては、シャーロック・ホームズの生みの親以外の何物でもない。しかし、『ランセット』という長い歴史の1ページに刻まれたドイルの寄稿を確認してみると、初期の頃のもの、医師として名を成そうとした若きドイルの勇気と挑戦を目の当たりにする。作家として大成した後、彼の医学への知識や正義感などを背景に世論を動かす発信をしたり、医学への思いを彼独自の言葉で表現したりしていた。四つのいずれの『ランセット』にも、彼の洞察力や発想力が発揮されている。

時代が刻々と変化してゆく19世紀から20世紀にかけて、自分の知性や感性、また人生を切り開かんとする気持ちによって、後世まで長く愛される物語を紡ぎ出したドイル。彼の想像力や表現力から創り出されたホームズ作品の世界観は、様々な媒体を通して人々を楽しませてきただけでなく、オマージュ作品やパステイシューも含めて、複層的に再現されてきた。

ドイルに関連するさらなる論考は、ドイル亡き後も『ランセット』に掲載されている。例えば、1936年の THE SHERLOCKIAN METHOD IN EPIDEMIOLOGY²²⁾、1937年の WAS SHERLOCK HOLMES A DRUG ADDICT?²³⁾ (筆者は Denis P. S. Conan Doyle で、ドイルの三男)、1954年の BAKER STREET DIAGNOSIS²⁴⁾ など、『ランセット』は当初の目論見どおり、自由闊達な表現の場としても機能していたのだろう。今回、ドイルの医師としての側面に光りを当てることで、当時の医学や科学を含めた社会的な出来事の一部垣間見ることができた。そうした社会や歴史は移ろいゆくが、他方、ドイルという一人の人間やその作品の魅力はこれからも色褪せない輝きを放つことだろう。

謝 辞

本稿の資料収集については、川崎医科大学附属図書館が、ドイル関連の『ランセット』の

紙面の検索や迅速な取り寄せまで、常にプロフェッショナルな助言と協力を惜しまずに提供してくださった。これは本稿の執筆過程で多いに励みとなった。ここに感謝の意を表す。また、自由な研究活動を奨励くださる川崎医科大学自然科学教室の大橋武文准教授に深謝する。最後に、豊かな学識で研究活動全般をご指導くださる川崎医科大学自然科学教室の西松伸一郎教授に深謝する。

註・引用文献

- 1) ドイルの経歴、作品の執筆時期などに関しては、以下2)～5)を参照した。本稿に直接引用した箇所は、出展文献の番号を本文中に付した。英文からの引用は全て筆者訳である。
- 2) Conan Doyle, A. *Memories and Adventures: Long Road Classics Collection*, 2022, Japan, Independently published
- 3) Conan Doyle, A. *A Life in Letters*, 2007, New York, Edited by Jon Lellenberg Daniel Stashower & Charles Foley
- 4) 日暮雅通『シャーロック・ホームズ・バイブル』, 早川書房, 2022年10月
- 5) ダニエル・スタシャワー『コナン・ドイル伝』日暮雅通訳, 東洋書林, 2010年1月
- 6) シャーロック・ホームズ作品からの引用は、以下7)～11)を参照した。本稿に直接引用した箇所は、出展文献の番号を本文中に付した。英文からの引用文は全て筆者訳で、原文を併記している。なお、作品名については《 》で表し、一般に最も馴染みがあると思われる新潮文庫の訳を拝借した。
- 7) Conan Doyle, A.: *The Case Book of Sherlock Holmes, The Blanched Soldier*. New York, Book of the Month Club. 1994
- 8) Conan Doyle, A.: *Adventures of Sherlock Holmes, A Scandal in Bohemia*. New York, Book of the Month Club. 1994
- 9) Conan Doyle, A.: *A Study in Scarlet*. New York, Book of the Month Club. 1994
- 10) Conan Doyle, A.: *Adventures of Sherlock Holmes, The adventure of the Blue Carbuncle*. New York, Book of the Month Club. 1994
- 11) Conan Doyle, A.: *Memories of Sherlock Holmes, Silver Blaze*. New York, Book of the Month Club. 1994
- 12) J. オブライエン『科学探偵 シャーロック・ホームズ』日暮雅通訳, 東京化学同人, 2021年1月
- 13) THE LANCET, Vol. 1, October 5, 1823, London, Edited by Thomas Wakley
- 14) Kitasato S : The Bacillus of bubonic plague. *The Lancet*. 1894 : 144 : 428-430. Doi: [https://doi.org/10.1016/S0140-6736\(01\)58670-5](https://doi.org/10.1016/S0140-6736(01)58670-5)を参照.
- 15) 北里の『ランセット』投稿時期の状況等について以下で言及している。宮野 佳, 本田蘭子. (2021) 秦佐八郎とペスト研究. 川崎医学会誌一般教養編, 47, 19-32
- 16) Conan Doyle, A. (1882) Notes on a case of leucocythæmia. *Lancet*, 119, 490.
- 17) Geary C. G. (2000). The story of chronic myeloid leukaemia. *British journal of haematology*, 110, 2-11.
- 18) Bennett, J.H. (1845) Case of hypertrophy of the spleen and liver in which death took place from suppuration of the blood. *Edinburgh Medical and Surgical Journal*, 64, 413-423.
- 19) Conan Doyle, A. (1884) The remote effects of gout. *Lancet*, 124, 978-979.
- 20) Conan Doyle, A. (1907) The case of George Edalji: a question for ophthalmologists. *Lancet*, 169, 189.
- 21) No authors available (1910) ST. MARY'S HOSPITAL. *Lancet*, 176, 1066-1068.
- 22) No authors available (1936) THE SHERLOCKIAN METHOD IN EPIDEMIOLOGY. *Lancet*, 228, 639.

- 23) Denis P.S. Conan Doyle (1937) WAS SHERLOCK HOLMES A DRUG ADDICT?. *Lancet*, 229, 292.
- 24) No authors available (1954) BAKER STREET DIAGNOSIS. *Lancet*, 263, 971.